

OB・OG 通信

全ての答えは現場にある

——仮説と検証で乗り切る——

第1期 OB 井川 倫士

こんにちは。毎度おなじみ1期の問題児、井川です。また一年の始まりにゼミの寄稿文を書いています。今年も締切りに間に合いませんでした。申し訳ないです…。さて今回は、近況報告、最近心掛けていること、野望、そして自分への戒めとメッセージを送りたいと思います。

◆近況報告と前回寄稿文の検証

2015年6月28日、茨城県銚田市議会議員選挙にて当選させて頂き、私は本市最年少議員となりました。小野ゼミの方達から多額の寄付を頂き、選挙戦を戦えた結果です。本当にありがとうございました。この噂ばかりでリアルな状況が語られない世界の「選挙」と「政治活動」について報告をさせてください。

地元銚田市は、農業産出額で市町村別トップ5の自治体です。けれども議員報酬は月額28万円。話題の政務活動費ありません。市町村議員の報酬はその自治体の人口比です。このため副業をしないと生活できません。でも夢を叶えました。

私の後援会活動、並びに選挙資金は合計約200万円でした。つまり人口50,000人の田舎の自治体であれば、この程度の金額で当選が可能だということです。この検証結果は、前回の寄稿文でも掲載した仮説と一致しました。だからこそ、皆さんの寄付が大きかったのです。

仮に「議員になって〇〇をしたい」と思っている人がいれば、周りにいる選挙に詳しい人の話を聞いてみてください。大体間違っています（笑）その人たちは故意にあなたを騙そうと思ひ、誤った答えを教えている訳ではないかもしれませんが。これも前回「なぜ人生の先輩からのアドバイスが役に立たない間違った答えであるのか」という命題への仮説から考えてみます。それは以下の3点。

仮説1：時代が違うので今の時代にマッチしないから

仮説2：噂話が独り歩きしていて、実際にその人が体験、経験したことではないから

仮説3：そもそも噂話が、ある一定の力のある人にとって都合の良いように操作されているから

私の選挙に対する検証結果は、これらの仮説の複合型でした。選挙に詳しい人たちは、あらゆる選挙をごちゃ混ぜにしてあなたにアドバイスするでしょう（つまり、国会議員選挙・都道府県知事選挙・都道府県議会選挙・市町村議会選挙・市町村長選挙。そしてこれらの補欠選挙）。選挙区の有権者数・当選者数が

異なる選挙を同じ1つの選挙という枠で捉えているため、アドバイスのほとんどが役に立たないのです。

別の想定として若い候補者が当選しやすい社会情勢に於いて、新人議員の当選は応援する古参議員の落選を招く場合が挙げられます。しがらみの無いやる気や発信力のある議員の出現は現状のステークホルダーたちの創り上げた世界を乱す結果に繋がるため、あなたの志を砕こうとするかも知れません。

以上のような理由から、周囲の選挙に詳しい人たちはあなたに間違えた情報を与えることが想定されます。ではどうすれば良いのか。実際に現場を経験した現役の議員に話を聴くことをお勧めします。

やはり現場に聴くことが大事なのです。加えて自分の住んでいる自治体や出身自治体の1次データや1次情報を調べてみてください。意外な結果が出てきますよ。

◆現場を知る人から、話を聴いて自分で体験する

自分が体験できるのは直接経験と間接経験しかありません（これを教えてくれたのは、同期の井上貴晴君です。イヤラシイ二十歳だ）。1日24時間と限られた時間の中では、直接経験を増やすことに限界があります。だから私は敢えて、20代には良質な間接経験を増やすことをお勧めします。このころは直接経験できる機会が多く、意識しないと間接経験を増やすことが出来ないからです。多感な時期だからこそ、間接経験から得られるモノも多いと感じます。書籍や新聞、映画等のメディアに触れる機会を増やし、興味を持った間接経験を有り余る時間を使い、直接体験できる現場に飛び込んで欲しいのです。

自分の選択は、A、B、C…という自身の知る選択肢からしかできません。まずは選択肢を増やして欲しいです。更に20代で多くの間接経験に触れることで、より質の高い情報を見抜き目利き力が養われていくこととなります。その結果、以降の人生を充実させることが可能となると考えます。「80:20の法則」(パレートの法則)の応用方法について、実感を伴った学びを得て欲しいです。

一方、1日を仕事と家族との時間で過ごすことが増える30代以降は、直接経験を増やすことに注力しています。なぜなら移り変わる時代の中で、今の時代に自分の感覚がマッチしなくなるからです。世間で語られる噂話や常識が事実と異なる状況を、議員になってから本当にたくさん経験しています。人の話を鵜呑みにせず、現場を知る人から話を聴くこと、又は自分で体験することを心掛けたいです。

◆私が実際に議員になって何をしたいのか

私は今回の選挙で3つのチラシを作成しました。最初から訴えたスローガンは、「パパママ視点でのまちづくり」です。自分に対するSWOT分析を行い、50歳以下の議員がゼロで、女性議員が1名の現状を強く意識したメッセージにしました。特にママさん達からの評価が高かったようです。

第1弾チラシは、地元銚田市の課題解決に対してこれまで多くの人たちから意見を聴き、自分の体験から得た仮説を「1ダースの約束」として示しました。その後の第2弾チラシでは、後援会活動を通してインタビューした現場の声（市民を含めた約1,000人分の意見）から、「1ダースの約束」を3つのプロジェクトにまとめ直しました。最後の第3弾は、ライバルである他候補者の政策を研究して、自分の政策を差

別化し精査した後に、選挙広報として配布しました。

次の3つがその政策ですが、これといった特徴を感じ無いかもかもしれません。しかしこれほどシンプルに「市民の声」を政策に描いた人物はライバルには居なかったということでしょう。(詳しくは web で)

- A) 市民のお金が正しく使われているかを分かるようにする
 - 「議員は何をやってんだ？興味も期待もしてねえよ」とは言わせない—
- B) 銚田に戻って来たい、住みたい若者の受け皿を整備する
 - 「若いのが減って、子供もいないし…年寄りばかりになっちゃうべ！」とは言わせない—
- C) 働きたい人が働ける場所や機会を増やす
 - 「銚田には働く場所がねえ。食品加工工場でもあれば…」とは言わせない—

◆自分への戒めとメッセージ

近年起こってきている文明のパラダイムシフト(斬新なアイデアにより時代が大きく動くこと)は、日本政府の政策方針転換からも見て取れます。これは2000年ごろから叫ばれてきた地方分権の流れから地方創生時代、「まち・ひと・しごと総合戦略」としてまとめられようとしています。

新しい時代には仮説を立て検証する能力を持ち、主体的に人生のハンドルを握ることが重要となってくるでしょう。つまり仮説検証や主体的な学びを实践する小野ゼミ生にとって活躍の好機と言えます。

こういう価値観の転換が起こる時代には、人生の先輩たちのアドバイスが通用しなくなります。しかし時代を超越した真理はいくつもあります。その1つが、「変化の最先端は現場にある」というもの。現場から得た情報を元に、小野ゼミで培ったフレームワークを用いた情報整理を行うことで、MECEに分析した結果から仮説を導き出し、その仮説を検証し続けてください。

しかし新しい仮説を多くの人に納得してもらうためには、「温故知新」という論語の言葉にもある通り、「ひと・もの・かね・ノウハウ」それぞれの歴史を知る必要があります。特に「ひと」は一個人の人生史へ敬意を払うべきでしょう。そこが“まさに現場”。『7つの習慣』にある通り、人は理解してから理解されるからです。現場にある数字や定性的な情報から、これまでの経緯を把握し未来を予測します。養ってきた真理を見抜く“自利き力”により、少しだけ先回りすることで時代を乗り切っていきましょう！お互いに“ふぁいと”！



著者の政治家 HP



著者，当選後の初登庁



著者の御息女，侑理ちゃんのお七五三の時の写真